

産地戦略

実施期間 令和7～11年度

実施主体 奈良県西和花卉持続農業協議会
都道府県 奈良県
対象地域 生駒郡平群町（平群町地区）
対象品目 キク（露地および施設）



新たに取り入れる環境にやさしい栽培技術の分類

● 化学農薬の使用量の低減	温室効果ガスの削減（水田からのメタンの排出削減）	温室効果ガスの削減（プラスチック被覆肥料対策）
化学肥料の使用量の低減	温室効果ガスの削減（バイオ炭の農地施用）	温室効果ガスの削減（省資源化）
有機農業の取組面積拡大	● 温室効果ガスの削減（石油由来資材からの転換）	温室効果ガスの削減（その他）

目指す姿

本地域は全国2位の小ギク産地で、かつ県内最大の花き産地である。市場から責任産地として求められている物日の安定出荷や高品質化を実現する必要があるとともに、大産地の責務として、みどりの食料システム戦略に沿った持続的生産体制の構築を目指す必要がある。

当地域の小ギク生産では、①夜蛾類（オオタバコガ等）の物理的防除を目的とした4mm目合いの簡易型ネットハウスが普及していた。しかし、農繁期の台風襲来時に、ネットの付け外しが困難であり、近年、普及面積が減少している。そこで、付け外しが不要なパイプハウスに0.8mm目合いの防虫ネットを設置し、夜蛾類と微小害虫（アザミウマやアブラムシ等）に対する物理的防除により化学合成農薬使用量の低減を図る。②ポリマルチによる被覆栽培が行われているが、生産者の経営面積拡大により、マルチの剥ぎ取り・回収作業の労力負担や廃プラスチック処理費用の高騰が問題になっている。そこで、バイオマス由来の生分解性マルチを使用し、マルチの鋤き込みによる省力化とカーボンニュートラルへの貢献、併せて廃プラスチック削減による環境負荷の低減を目的とする。

これらの技術について、策定したマニュアルの配布や栽培研修会等を通じて広く産地に普及させることで、小ギクの高品質切り花の安定生産と、持続的生産体制構築の両立を目指す。

現在の栽培体系 ① ネット被覆による害虫防除

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	備考
露地 小ギク栽培			土壌消毒	定植 摘芯				収穫					
農薬による防除 ポリマルチ被覆				農薬による防除					マルチ 剥取り				農薬散布15回 マルチ剥ぎ取り作業：2～4時間/10a 廃プラ処理作業：1時間



グリーンな栽培体系

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	備考
ネット被覆した 小ギク栽培			土壌消毒	定植 摘芯				収穫					
ネット被覆 バイオ由来生分解性マルチ被覆				農薬による防除							マルチ 鋤込		農薬散布11回 鋤き込み：1時間/10a



現在の栽培体系 ② 生分解性マルチによる省力化、環境負荷低減

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	備考
露地 小ギク栽培			収穫			苗取	土壌消毒	定植					土壌消毒と同タイミングでマルチング
ポリマルチ被覆			ポリマルチ被覆			マルチ剥取り後 展張		ポリマルチ被覆					マルチ剥ぎ取り作業：2～4時間/10a 廃プラ処理作業：1時間



グリーンな栽培体系

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	備考
露地 小ギク栽培			収穫			苗取	土壌消毒	定植					土壌消毒と同タイミングでマルチング
バイオ由来生分解性マルチ被覆			バイオ由来生分解性マルチ被覆			マルチ鋤込後 展張		バイオ由来生分解性マルチ被覆					鋤き込み：1時間/10a

グリーンな栽培体系等の取組面積の目標

	現状R6	目標R11	備考
対象品目の作付面積（ha）	85	▶ 85	アンケート及び現地調査により確認
環境に優しい栽培技術の取組面積（ha）	2.38	▶ 4.4	アンケート及び現地調査により確認
うちグリーンな栽培体系の取組面積（ha）	2.38	▶ 4.4	アンケート及び現地調査により確認
省力化に資する技術の取組面積（ha）	2.38	▶ 4.4	アンケート及び現地調査により確認

環境にやさしい栽培技術・省力化に資する技術の概要

〈技術の内容・効果〉

分類	産地の慣行	新たに取り入れる技術	期待される効果
環境	ネットハウス（一部）	▶ ネットハウス（0.8mm目合いネットハウスの新規導入、4mm目合いからの変更）	化学農薬の使用回数の削減（アザミウマ対策） 薬剤抵抗性の発生リスク軽減
環境省力	ポリマルチ	▶ バイオマス由来生分解性マルチ	剥ぎ取り・回収作業の省力化

〈技術の効果の指標・目指すべき水準〉

分類	指標	現状	目指すべき水準	備考
環境	化学農薬の使用回数（回）	15回	▶ 11回	
環境省力	剥ぎ取り・回収作業の省力化	3～5時間	▶ 1時間	剥ぎ取り・回収作業の削減

* 環境にやさしい栽培技術のうち化学農薬・化学肥料の使用量の低減および省力化に資する技術については、原則、検証結果を踏まえて効果の指標・達成すべき水準を設定する（有機農業の取組面積拡大、温室効果ガスの削減に資する技術については、当該欄の記載は任意とする）

* 化学農薬の使用量の低減については、どの剤の使用量を削減するのか、どの剤からどの剤へ切り替えるのかが分かるように記載する

グリーンな栽培体系の普及・定着に向けた取組方針

協議会の構成員であるJAならけん西和花卉部会（農業者）を対象に、実証試験の結果について、検討会・講習会にて情報提供を行い技術の普及を図る。

関係者の役割

関係者名	JAならけん西和花卉部会	奈良県北部農業振興事務所 農業振興課	奈良県病害虫防除所	JAならけん椿井営農経済センター
役割	実証圃の管理 技術の検証	事業実施手続き 事業のコーディネート	情報提供 技術指導	技術協力 営農指導